

## 全国動物病院が選ぶ腫瘍サプリメント\*

村谷親男<sup>1)</sup> 青木芳秀<sup>2)</sup> 太田亟慈<sup>3)</sup>

Chikao MURATANI Yoshihide AOKI George OTA

亀山和久<sup>4)</sup> 武隈勝朗<sup>5)</sup> 山下真理子<sup>6)</sup> 伊藤博<sup>7)</sup>

Kazuhiisa KAMEYAMA Katsuro TAKEKUMA Mariko YAMASHITA Hiroshi ITO

近年の腫瘍性疾患の増加に伴いサプリメントなどによる補完療法、の必要性も再認識されるようになった。そこで、今般は全国の臨床獣医師による動物用サプリメントの使用状況に関する意識調査を行った。その結果、犬猫での臨床効果や医学的根拠が明確なものが多く選択されていた。使用症例は、骨肉腫や鼻腔内腫瘍などの外科処置の不適症例や老齢動物における悪性腫瘍が多かった。臨床比較試験では、複合キノコ製剤がプラセボに比べ、「嗜好性」、「食欲」、「元気」、「体重」、獣医師判定による「QOL改善効果」と「抗腫瘍効果」および「飼主の満足度」の全て項目において、有意に高かった。腫瘍サプリメントに関しては、臨床効果が不明確であり、獣医師による判断基準は難しいものである。しかし、近年の社会的なニーズに伴い、QOLの改善など緩和ケアに焦点をあてた評価方法も必要であると思われた。

キーワード：腫瘍サプリメント、臨床比較、複合キノコ製剤

### はじめに

腫瘍性疾患は、伴侶動物において年々増加している疾患である。当院においてもその増加率は顕著である。それに伴い獣医医療における腫瘍に対する研究も盛んとなり、現在では様々なアプローチがなされている。特に、内科療法においては抗がん剤のジェネリック医薬品の使用に伴い選択肢は増え、治療症例数が増加している。しかし、抗がん剤の使用が身近になった反面、獣医医療における抗がん剤の問題点や抗がん剤による治療の限界点も見えるようになり、新たなる選択肢

BRM(Biological Response Modifiers)療法の必要性も再認識されるようになった。このような状況を踏まえ、今般、動物用サプリメントに対する病院の意識調査と動物用サプリメントを使用した臨床比較試験を実施したので報告する。また、我々のグループにおいて参考としている動物用サプリメントの選択基準について紹介する。

### 病院アンケート調査

全国10都府県12動物病院において、腫瘍性疾患に対する動物用サプリメントの使用状況について

\* The dietary supplement for malignant which is chosen by animal hospital in Japan

<sup>1)</sup> 兵庫ペット医療センター：〒661-0025 兵庫県尼崎市立花町3-1-5(06-6428-2565)

<sup>2)</sup> 青木ペットクリニック：〒816-0961 福岡県大野城市緑ヶ丘4-17-5

<sup>3)</sup> 犬山動物病院：〒484-0894 愛知県犬山市羽黒大見下29

<sup>4)</sup> 亀山動物病院：〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松4985-3

<sup>5)</sup> たけくま動物病院：〒016-0856 秋田県能代市藤山114

<sup>6)</sup> 日本動物高度医療センター：〒213-0032 神奈川県川崎市高津区久地2-5-8

<sup>7)</sup> 東京農工大学動物医療センター：〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

アンケート調査を実施した。調査項目は、「使用製品とその使用頻度」、「選択理由」および「処方症例」とした。使用製品については、犬猫用Dフラクションやアガリーペットサメ軟骨が高く、その選択理由として、犬猫の臨床データがあること、医学的な根拠が明確に示されていること、品質がよいもの、などがあげられた。処方症例は、外科処置の不適症例や老齢動物における悪性腫瘍、末期がん症例などが対象であった。

### 臨床比較試験

全国10都府県13動物病院において、腫瘍性疾患に対する動物用サプリメントの臨床比較試験を実施した。対象動物は上記病院に来院し、悪性腫瘍と診断された犬103頭を用いた。複合キノコ製剤給与群、対照群として既存製品給与群(2製品)およびプラセボ給与群に分け、各製品の給与方法に基づき、給与した。評価項目は、「嗜好性」、「食欲」、「元気」、「体重」、「腫瘍の大きさ」、獣医師判定による「QOL改善効果」と「抗腫瘍効果」および「飼主の満足度」とした。ここではその一部を紹介する。試験の結果、嗜好性は「最初から普通に食べる」の項目で、複合キノコ製剤群が70%であり、他の製品群に比べ最も高く、プラセボ群(40%)と比較して有意に高かった( $p<0.01$ )。体重変動は「10%以上の体重増加」の項目で、複合キノコ製剤群(14.7%)が最も高く、プラセボ群(0%)と比較して有意に高かった( $p<0.05$ )。これは、食欲増進も含めた複合キノコ製剤によるQOL改善を示唆するものであった。腫瘍の大きさは「腫瘍実質の25%以上の増大」の項目で複合キノコ製剤群(16.7%)が最も低く、プラセボ群(40%)と比較して、腫瘍増大の抑制効果が期待できるものであった( $p<0.01$ )。獣医師判定によるQOL改善効果および飼主の満足度においても、複合キノコ製剤群が有意に高かった( $p<0.01$ )。リピート率においても複合キノコ製剤群が高かったが、これは複合キノコ製剤が小型の高嗜好性錠剤であることやQOL改善率の高さなど、複合キノコ製剤の特徴によるものと思われた。

### 最 後 に

サプリメントは食品であり、その薬理作用や臨床効果が明確に示されていないことがほとんどである。また、動物用医薬品ではないため、その有効性や品質を客観的に評価されることは少なく、サプリメントの周辺情報や臨床獣医師の知識・経

験的判断による使用が多い。今般、臨床比較試験を実施し、使用するサプリメントを正確に理解し客観的に評価する上で、臨床データが重要なアイテムとなることが分かった。また、これらのサプリメントは癌組織に直接作用する抗腫瘍効果よりも、腫瘍性疾患に伴う二次的な症状の改善に効果的にはたらき、QOL向上に寄与するという有用性を改めて認識することとなった。更に、サプリメントは、主要成分の配合量(濃度)や薬理作用などの記載があまり明確ではないため、企業におけるサポート体制(営業対応)はサプリメント評価に対する重要な判断材料である。サプリメントといえども、企業との信頼関係や営業員による情報交換は重要であろうと思われる。

近年、新しい動物用サプリメントが多数販売され、製品選びが難しくなっている。また、製品に関する情報も統一されておらず、信頼性に欠ける情報も多い。そこで我々の病院グループでは、動物用サプリメントの選択基準として以下を目安に情報交換を行い、サプリメントを利用している。①臨床試験データは対照群が設定され、症例数として最低50症例以上あり、統計学的に評価されているもの、②企業の信頼度を重視し、営業員の対応が十分になされているもの、③高品質(GMP工場で製造)であること。

今般のアンケート調査および臨床比較試験では、液剤製品の『犬猫用Dフラクション』が企業の信用性、医学的根拠の高さ、営業員による学術情報提供などの理由により高い評価を得た。粉剤では『アガリーペットサメ軟骨』が、主要成分アガリクスの認識度、営業員による学術情報提供などの理由により評価が高かった。錠剤では、新たに開発された『複合キノコ製剤』の高い有効性が確認され、配合成分の優位性と小型の高嗜好性錠剤といった利便性の高さから、今後注目を集める製品であると思われた。